甲状腺外科草子 166

心に響く歌詞：小椋佳

杉野　圭三

小椋佳の歌に出会ったのは、同級生の弘中幹夫（広島大学医学部 1978 年卒、1999 年逝去）の下宿だった。今まで聞いたことのない心に染み入る歌詞と旋律に驚いた。そのアルバムが第３作目の「**彷徨**」である。

青春（1971）　**彷徨**（1972）　**残された憧憬**（1974）

その後、評価は年々あがり「**残された憧憬**」、「**遠ざかる風景**」などのアルバムがリリースされた。

さらば青春

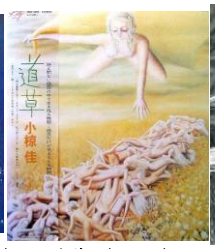
僕は呼びかけはしない、遠くすぎ去るものに
僕は呼びかけはしない、かたわらを行くものさえ

六月の雨

六月の雨には　六月の花咲く
花の姿は変わるけれど　変わらぬ心を誓いながら
いくつ春を数えても　いくつ秋を数えても
二人でいたい

しおさいの詩

青春の夢にあこがれもせずに
青春の光を追いかけもせずに
流れていった時よ　果てしない海へ
消えた僕の　若い力　呼んでみたい



遠ざかる風景（1976）　**道草**（1976）　NHK 出演 1976

長年「覆面歌手」として素性も分からない状況だったが、1976 年に初めて NHK がコンサート企画を行い、放映されることとなった。「まさか、東大文一から第一勧銀へ入社しサラリーマンのオジサンがこんな歌を作っていたとは！」、小椋佳ファンには大衝撃だった！

俺たちの旅

夢の坂道は　木葉模様の石畳
夢の夕日は　コバルト色の空と海
夢の語らいは　小麦色した帰り道

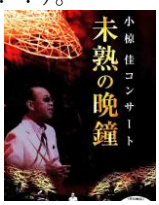
めまい

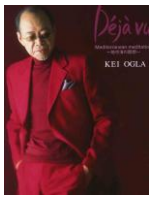
時は私に　めまいだけを残してゆく
だから暮れ染（なず）む海の夕凪よ
いかりをほどいてゆく船の
心留めて

シクラメンのかほり

真綿色したシクラメンほど清しいものはない
出会いの時の君のようです
ためらいがちにかけた言葉にをそめて
驚いたようにふりむく君に
季節が頬を染めて過ぎてゆきました

布施明に提供した「シクラメンのかほり」が大ヒットしたのは 1975 年であった。「かほり」は小椋の妻「佳穂里」を意味する説もあるが、本人は否定しているとのこと（本当かな？？）。





小椋は胃癌術後も精力的に活動し、歌詞は益々複雑で哲学的なものとなったが、古希を過ぎても張りのある美声で、コンサートは楽しみの一つであった。

次の歌は同期の**弘中幹夫追悼号**（広島大学第二外科同門会誌 DOMON 95, 2000）に引用させていただいた。

スタンド・スティル

トロピカルフィッシュの泡音の
絶え間ない循環（くりかえし）の中で
生き残る時間
君といられたことを　だれに感謝しようか

参考資料：Wikipedia など

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2026 年 2 月 13 日